

子供の領分

ほった
すなお
堀田 素生

それは走り、跳ね回り、歌い叫び、踊り狂う。時に耳をつんざくような金切り声をあげながら、その内なる昂ぶりを何のためらいもなく表出させる。近くにいる母親が彼らのそれよりも大きな声で叱りつけ、そのエネルギーを抑制しようとするが、少しするとまた雄叫びを上げたり、ばたばたと手足を振り回したりといったように、彼らを制御することは一般的には困難だ。

子供は無知だ。無知であるがゆえに、社会からの要請を無視し、自分自身を表現することに恐れを感じない。無知であるということは底知れぬ強さだ。彼らは地面にべったりと座ったり、寝そべったり、手をついて這いまわったりする。その手を口に入れたり、べろべろと舐め、ついでに自分が履いている靴を脱いで齧ったりする。泥遊びをする。彼らは地面と一体だ。砂

場に置いてあったおもちゃを舐める。誰が触ったかわからない手すりを舐める。口に入れたり、舐めたりすることであらゆるものとの「出会い」を確かめる。

そうやっているとき大抵、「ばい菌だらけだからやめなさい」と叱られ、病原体や不潔の概念を知ること为契机に、私たちは地面や、世界と分断され、清潔であることを学ばされる。「触りたい」や「舐めたい」という気持ちは殆ど尊重されないことを学ぶ。

私たちは成長する過程で、衝動を抑制するようになる。自分自身でいられなくなる。叫んだり踊ったり跳ね回ることができなくなるし、いろいろなものに触れるとき清潔か不潔かを意識するし、生命力の爆発を、社会的な規範に合わせて、抑え込むことが求められる。社会的な期待に応えるために、感情を抑えたり、行動を制限したりすることが求められる。その分「いい子」と呼ばれ大人から愛されるようになるので、子供はそれに徐々に従うようになる。そのうちに大人が言うから仕方なく従っていたはずの規範に違和感を抱かなく

なり、自分が親になったときに自由に振舞う子供を吐りつけるようになる。稀に大人に従わず、衝動をコントロールすることが困難な子供は最近では発達障害と呼ばれる、親に病院に連れて行かれ薬を飲まされたりする。そのくらい、生命力の爆発というものは社会的には不適切で不都合なものとして扱われているのだ。

私は子供が大の苦手だ。子育ての苦労話や、街中や公共の場での世間の冷たく非協力的な態度に対する怒りがSNSで多く発信されるようになり、子供や子連れの親を労わりましょうという風潮が強い昨今、「子供が苦手だ」なんて言うのと特に悪く思われるので肩身が狭いが、はっきりと言って私は子供が本当に苦手だ。といつても、苦手な理由は彼らが社会的な規範に沿って行動していないからということではない。騒がしさや不潔さが直接私を不快にさせているわけではなく、そう振舞うことができる彼らを見ると、何とも言えない「気まずさ」を感じるからだ。

そう感じるのは、おそらく私があまりにも自分自身

の生命力を抑制しながら生きていくことの証左かも知れない。ありのままに振舞い、全身でその「生」を表現している彼らを見ると、私は自分自身を社会の要請のために裏切っていることを思い出してしまう。それが社会から除け者にされないために必要なことであるとしても、だからといって歌ったり踊ったり跳ねたりしたい気持ち私が私の内から無くなるわけではないのだ。私は以前住んでいた場所がよく、誰もいない夜の帰り道でスキップをしながら帰ったり、いやな気分の日は落ちていく枯葉やビニール袋を思いっきり蹴り飛ばしたりしていた。小声で鼻歌を口ずさんだり、ふざけた歌詞をつけてミュージカル調に歌ったりもしていた。しかし転居した今の地域は、ほとんど時間帯によらず人通りが多く、それが出来なくなってしまった。もし社会的な常識を無視してこれをすれば、まるで狂人に見えるだろうし、他の通行人に不安や不快感を与えかねない。

人間が豊かに暮らすには、遊ぶことが必要だ。遊ぶことが許される環境は、物質的な充足よりもむしろ重

要なものかもしれない。歌ったり踊ったり跳ねたりすることは、場や状況にそぐわない場合は眉を顰められるが、芸術や文化の中では許されてきたということを経験すれば、遊ぶことが人間にとって如何に禁じ得ない衝動か、また大切な行為かということがよく分かるように思う。

子供でいることをもって自分自身に許すにはどうしたらいいだろうか。そういえば以前、こんなことを考えたことがある。「嫌われる勇氣」というタイトルの著書が流行ってから、嫌われるリスクを取ってでも、他人や世間体よりも自分の気持ちに従うことが大切だ」という意見をよく目にするが、それは「好かれていた」という誰にでも普遍的に備わっている本能を無視することなので、一見、自分の気持ちを大切にしているようで、結局自分を裏切っていることになる。これを応用して、社会に嫌われるかどうかよりも自分の遊びたい衝動を優先させることは、やはり自分を裏切っていることになる。「好かれない」と「自分を表現したい」の間で延々と戦って、でもなんだか時々我慢で

きなくなつて衝動に任せて自分を爆発させて、そしてらもちろん敵が出来たが、一方で何故かそんな自分を好いてくれる人も現れて、…というふうに、「遊び」も「自分」も意図するまでもなく何らかの形で自然に表れてしまうものなのかも知れない。そう、だってほんとうにまっさらな子供は「遊ぶ」ことについて選択なんかしていない。自然と遊ばずにはいられないのが子供だ。生命力は、いずれは爆発してしまうモノなのだ。制御できていると思いついていても、実際にはわからないものだ。自分をコントロールできていると過信しないほうが良いくらいだ。だから私は今度から子供を見たら、気まずさを感じるのではなく「自分の中にもきつと子供がいるし、その子供を好いてくれる人も(たぶん)いる、だから少しは安心して自分を出しても大丈夫だ」と思うことにしよう。

(2023年3月 チョコレートのにおが残る部屋にて)